

# 大学キリスト教週間への招き

## 建学の精神 - 関西学院の「やる気」

打 樋 啓 史

黒澤明監督の「生きる」という映画がある。市役所に勤める主人公は、25年間の勤務の中で新しいことに挑戦することもなく無難に漫然と日々を過ごしてきた。そんな彼はある日自分が癌で余命半年と知る。絶望し荒れるが、彼はやがて気づく。残された日々の中で何かを創ること、それが自分の生きる意味であり、そこに救いがあると。以来、彼は生まれ変わったようになり、貧しい地区に公園を作るため奔走する。ついに公園が完成したある日、彼はそこにあるブランコに揺られながら、静かにしかし満ち足りた表情で息を引き取る。印象的なのが、主人公が公園建設を決意した時に「それは無理です」という部下たちに対して繰り返して語るセリフである。「いや、きっとできる。やる気さえあれば。」

春季大学キリスト教週間の主題は「関西学院建学の精神」、つまり関西学院をかけがえのないものとしてきた「関学スピリット」のことである。「精神／スピリット」の語源を聖書に辿れば、これが「風」や「息」を表す言葉であることが分かる。風も息も目には見えないが何かを動かす。風が吹けば木が揺れるし、息によって生物は生きている。同じように精神／スピリットも目には見えないが内側から人を動かす。それは内面に吹く風、人を新しい生き方へと押し出す息吹のことだ。この精神／スピリットが、「生きる」という映画では「やる気」という言葉で描かれていると言えるだろう。

118年前、ランバス宣教師は「やる気」をもって海を渡った。日本の若者にキリスト教主義に基づく本物の教育を授けたいという「やる気」、それが関西学院を創ったのだ。しかし、ここでいう「やる気」とは単なる自己実現や成功のための奮起とは異なる。「生きる」の主人公の「やる気」は、死という自分の限界を見据えて、限りある命を特に不利な立場にある他者のために用いようという決意だった。ランバス宣教師の「やる気」も、神の前で自分の限界を知り、感謝に支えられ、自らの生を他者と分かち合おうとする憧れと情熱だった。この週間、今日まで学院の歴史がそのような意味での無数の人々の「やる気」によって紡がれてきたことを心に刻みたい。そしてこの学院に連なる私たちが、それぞれの課題に向き合うための「やる気」を見出すきっかけになればと願っている。

(社会学部宗教主事)